

## 7 超自然的知識

### 7-1 山・川・海

#### 7-1-2 ヌプリ

「山の神」は女の神で、ヌプリフチ *nupuri huci* と言った。造材の人が見たことがあると言っていた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

水、火、山（何々ヌプリ *nupuri* の神）、（魚ののぼる）川の神様の名前を言ってイナウ（木幣）を作る。毎年作って行くのでヌサにはイナウがたくさんたまる。ヌサの前で古いイナウを燃やす。（家の中の炉でイナウを燃やすことはない。）

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 7-1-3 湖沼

「湖水の神様」をトーコロカムイ *to kor kamuy* と言う。

[阿寒 小鳥サワ氏]

湖で漁をしている時に、以前に災難があつた場所にはイナウが立ててあるので、そこでは舟を下りて煙草をもっていたら煙草をやってお祈りする。魔が刺すような危険を感じたら舟の上からでもお祈りした。

クマに食われたとか、迷ってどこに行ったかわからないとか大きい災難があつたような所にはわざわざイチャルパ *icarpa*（先祖供養）をしに行く。たとえば、パンケとか、ボツケから雄阿寒に向かったところの雄阿寒西では、舟から落ちて行方不明になったことがあつたので、そこにはイチャルパをしに行く。

[阿寒 小鳥サワ氏]

### 7-4 小動物

#### 7-4-3 ヘビ類

アオダイショウのことをタンネカムイ *tanne kamuy* という。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 7—6 植物

### 7—6—1 樹木

トウキ túki 「杯」とパシユイ pasuy 「酒箸」とを持って行って、塩で清めてから、剥ぐ前に御神酒と、米、煙草をあげて「この木をいただきますから、よろしく頼みます」とアイヌ語でお祈りする。木の皮とりはほとんど女がするので女が祈る。

[阿寒 小鳥サワ氏]

皮剥ぎの時に、木を倒して皮を剥く場合には、ニー カムイ ni kamuy (山の神に)に向かって「皮をいただきます」と祈ってから木を切り倒す。木の神には、女の人でもお祈りできる。

[阿寒 小鳥サワ氏]

皮を剥ぎ終わってから、木の根元にチャツチャリ catcari (酒などを振りまく) してくる。女の方は、正式にカムイノミ kamuy nomi まではしない。正式じゃないから、持って行ったカップ酒を直接ビンから酒を振りまく。男の方は、パスイ pasuy (酒箸) で正式に酒を振りまく。(道東編3—1—4参照)

[阿寒 小鳥サワ氏]

オヒョウの木は、アットウシ ニ attus ni という。オヒョウの木が女の神とか男の神とか聞いたことはないが、山の神様はきれいな女の人で女の神だ、と造材をする人が言っていた。

火の神は、アベウチフチ ape uci húci、アベウチエカシ ape uci ekasi という。山の神と火の神は関係がある。木のおかげで火が焚けるからだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 7—7 火

### 7—7—1 火の神

囲炉裏の周りにキナを敷いて座るようにしてあった。炉ぶちは丸太を組んだもので、表面をタシロ rasiro (山刀) で平らに削ってあった。そこの隅にカムイフチ kamuy húci (火の神) のイナウ inaw (木幣) があって、入り口から見て、右にエカシ、左にフチのイナウが立っていた。カムイノミの最初にアベウチエカシ、アベウチフチ ape uci ekasi, ape uci húci という。

[阿寒 小鳥サワ氏]

火の神に祈るときはアベウチエカシ、アベウチフチ ape uci ekasi, ape uci húciと言って拝

んだ。父は、おいしいものを買ってきたらかならず最初に火の神にささげた（アベウチイノミアン *ape uci inomi an* 「火の神にささげなさい」）。

[美幌 平林ミツエ氏]

火のことをアベウチ *ape uci*ということもある。「火を焚け」はアペオマレ *ape omare*という。灰（あく）を何と行ったかは忘れた。灰は木の根のおしっこなどのかからないところに捨てた。

[美幌 平林ミツエ氏]

囲炉裏の火が跳ねると火の神に塩をまいて跳ねないように頼む。火の神が怒っているのをそれを慰めるということだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

カムイノミ *kamuynomi*（神への祈り）の時エカシは先にたばこ、米、塩、麴で炉の中を清める。炉ぶちの四つ角には、係りの男たち（エカシでなくても若い男でもよい）が塩を山にしてちよつと積んでおく。エカシは自分の前、炉の縁に（トウキでもお盆でもいいがその上に）一つにまとめて塩、米、たばこ、麴を置いておく。

エカシが炉の中に塩をまき、次に上座、下座の順に清める（家の中にも塩をまいて清める）。それからカムイノミが始まる。最初にアベウチエカシ、アベウチフチ *ape uci ekasi, ape uci huci* と言う。

[阿寒 小鳥サワ氏]

イチャルパ *icarpa*（先祖供養）の時、火の神様（炭）に塩、麴、米、たばこをささげる。燠を炉の中心から下手に移す（道東編6—5—3参照）のは、イチャルパは神様にはできないので「一步下がってやる」ということだ。終わったら燠を火元に戻す。

イチャルパ *icarpa*（先祖供養）の最後にエカシが火の神様に終わりましたという挨拶をする（このとき火の神様にパスイ *pasuy*（酒箸）でお酒を捧げる）。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 7—8 雷の神

雷が鳴ったときの踊りがある。ヨモギを持ってフチ達が踊る（「雷よ、落ち着いてくれ」というような意味ではないかと思う）。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 7—9 家の神

家にはチセ コロ カムイ cise kor kamuy (家の神) のイナウが置いてある。自分の父の家は、オンネ チセ onne cise だったが普通の家にも必ずチセ コロ カムイが置いてある。

[屈斜路 日川キヨ氏]

## 7-12 その他

### 7-12-3 道具・器物の神

#### 舟の神

舟はチプ カムイ cip kamuy と言つて神だ。丸木舟を造る木を倒す時にもカムイノミをする。舟ができると舟が少し湖を渡つて来てから、陸(おか)でカムイノミ kamuy nomi をする。酒を造つて飲み、踊りを踊る。

船首にふさのついたイナウ inaw に長い棒の脚をつけて立てていた。このイナウが舟を守ってくれる。

舟は、修繕しながら使うと40年ももつ。舟は古くなると陸(おか)にあげてカムイノミすると聞いているが実際に見たことはない。

[阿寒 小鳥サワ氏]

### 7-12-4 天体の神

#### 太陽・月の神

モウル mour は肌褌袴みたいなもんだ。まごばあさんの時代には、女は、お日様、お月様に肌を見られてはいけなかったのでモウルを来て風呂に入った。モウルの中で身体をこする。

[阿寒 小鳥サワ氏]

赤ちゃんを産むと7日から21日の間、お日様に失礼だから、お日様に当てられないとタオルでも風呂敷でも何でも被りものをつけて外を歩いたものだ。

[阿寒 小鳥サワ氏]

#### 雷

雷が鳴るとき、日食や月食の時に暗くなるから雲に負けるなどノヤ noya (ヨモギ)を一握り手に持ってそれを振りながら家の入口で踊った。太陽や月(チュプ カムイ cup kamuy)がんばれ、という意味だ。子どもの時にフチ huci (まごばあさん)にやらされて踊った。モン・フチ(祖母)は、月食や日食のときの踊りと歌を教えてくれた。月食のときも日食のときもフチは片手に鎌(悪いカムイを切るため)、片手にヨモギを持っていた。そのときの歌はNHKと更科源蔵先生が録音して持っている。

[阿寒 小鳥サワ氏]

## 日蝕

7、8才のとき、フチに「お日さんがお月さんに負けるから、早く踊れ」と言われた。ヨモギ（ノヤ noya）や色々な草を片手に持って、家の入口で「お日さん負けるな」と踊り、神に頼む。

[阿寒 小鳥サワ氏]

太陽と月をチュプカムイ cup kamuy という。

昭和11年の日食のとき美幌の野崎に住んでいて、ちょうど「麦の草取りをせ」と言われていた。母は弟を産んだ後で家の中で寝ていた。日食が始まると母は家から出てきて、とつさにヨモギで弓を作り、枯れたヨシを矢にして太陽の方に打つ真似をしながら

チュプカムイ ホー cup kamuy ho:

エライナ ホー érayna ho:

ヤイヌムバ ホー yaynumpa ho:

と歌いながら踊った。「おてんとさん、大変だけど身を守れ（ヤイヌムバ）」という意味の歌だ。矢を射るまねをするのは、太陽に悪い者がかぶさってきたので、その悪者を撃つということだ。

[美幌 平林ミツエ氏]

## 月蝕

月蝕のときには、「雲に負けるな」という。早く踊れ、と言われたのに踊り方を知らなかったため、ヨモギを持って前後に振って踊った。

### 7—12—5 便所の神

便所（アシンル asin ru）の神は、便所の下の方なので便所近くにへその緒を捨てる。便所の神様にもイナウを捧げて、粗末にはしない。イナウは、普通のイナウと少し形が違くと、布施のじいさんが言っていた。

[阿寒 小鳥サワ氏]

### 7—12—6 神への祈り

オンネ チセ onne cise で一年に一回集まって歌ったり踊ったりする。私の徹別の先祖の家にみんなが一年に一回集まってやったので覚えている。

この時にドブロクを作って集まった人にふるまい、喜んでもらう。みんなが喜んで歌って踊

つていれば、先祖も喜んでくれるし、神様も喜んでくれる、ということで喜びの歌を歌って踊ったものだ。

一年に一度の祭りには、男の人は別な踊りをやる。これをタクカラ takkar という。先祖の神様（先祖が祀っていた神様、火の神とかチセ コロ カムイ cise kor kamuy 家の神）は喜んで下さい、と言ってやる。男の人が二人か三人で声を出しながら踊る。囃子のみで文句はない。今はタクカラできる人がいなくなった。

[屈斜路 日川キヨ氏]

一年に一回の祭りの時、徹別のコタンにも方々から人が来た。屈斜路でやれば阿寒湖など方々から来る。誰それはムククリをやりなさい、誰それは踊りなさい、と言ってやつてもらおう。ムククリを複数の人がやる時には音を合わせてやる。同じ曲をやるが、息の仕方などが少しずつ違う。

[屈斜路 日川キヨ氏]

カムイノミ kamuynomi（神への祈り）は男の人がするもので、皆に聞こえるくらいの大きな声でやっていた。パスイスイエ pasuy suye（酒箸で酒をイナウなどに垂らす）する人は多いがカムイノミをする人は多くなかった。コタンによつては神様に拝むときに大きな声で拝むものではないという所もあるが、徹別では大きな声でやる。

[屈斜路 日川キヨ氏]

春と秋の祭りの時に、カムイノミをした後、小さいイナウ inaw を炉の灰に刺して燃やして、そのイナウの倒れる方向で一年の豊猟を占う。イナウが燃えつきて上座の方に倒れれば、豊猟で、下座の方に倒れれば、猟運が悪いと言う。

[阿寒 小鳥サワ氏]